



mnividens

【オムニヴィデンス】



クダノハマギョリュウ (管の浜魚竜)

上の写真は南三陸町歌津 管の浜にある「魚竜館」に、露頭ごと保存されている標本。1985年に旧歌津町職員により発見され、産出状態をそのまま保存・展示するため建物が造られました(左写真の水色の建物)。「魚竜館」は2011年の津波で被害を受けましたが、建物構造と標本に大きな損傷はなく、その後は標本保護対策を強化して維持されています。左写真の画面奥にはウタツギョリュウ産地である館崎方面が見えます。

クダノハマギョリュウの産出層準は、ウタツギョリュウを産出した大沢層よりも上位の伊里前層最下部にあたり、より新しい年代(中期三畳紀)に属します。ミクソサウルス科の一種として現在研究が進展しています。

(根本 潤)

ウタツギョリュウ化石
天然記念物国指定 50周年
記念号その2

2026.3
NO.

74

ウタツギョリュウ化石天然記念物国指定 50 周年記念 シンポジウム、化石鑑定会、そして新たな常設展へ

前号のあらすじ

ウタツギョリュウ化石の天然記念物国指定 50 周年を記念して、南三陸において特別企画展を 2025 年 7 月 19 日（土）から 10 月 19 日（日）まで開催しました。初日のオープニングセレモニーに続いて、翌 20 日には東北大学青葉サイエンスホールにおいて藻谷亮介カリフォルニア大学教授を講師にお招きした記念講演「サカナのようなは虫類の物語～恐竜時代における魚竜類の進化」を開催しました。続く 21 日（月・祝）には、再び南三陸にて同教授による講演会「世界の魚竜～時と場所をまたいだ繁栄の歴史」を開催しました。それらと並行して、南三陸町教育委員会や有志団体とともに、記念スタンプラリー・化石の町ぬり絵展覧会・化石フェア・子ども自然史ワークショップなども実施しました。ここまでを本紙前号（No.73）でお伝えしたところです。

今号では 50 周年記念行事の後半として、8 月 30 日（土）に平成の森アリーナを会場として開催した、6 名のパネラーによる記念シンポジウム（写真 1～4）と、10 月 13 日（月・祝）に実施した化石鑑定会、そしてリニューアルした常設展示についてご報告します。

1. 記念シンポジウム「魚竜化石と共産する多様な生物相」

特別企画展のメインテーマであるウタツギョリュウやこれを産する大沢層の化石にかんする研究はこの 15 年間に急速に進展してきました。大沢層は、古生代末（ペルム紀 / 三疊紀境界 = P/T 境界: およそ 2 億 5200 万年前）での、地球生命史上最大といわれる生物大量絶滅事変の後の生物の生態系回復過程期の浅海の堆積物（およそ 2 億 4900 万年前～ 2 億 4700 万年前）で、そこに含まれる化石はこの回復期の生物相を記録する重要な資料です。シンポジウムでは、この大沢層やそこから産する化石を現在研究中の研究者に、研究の現在の到達点についてお話いただきました。会場には、町内外や遠くは東京からの参加者を含め、計 105 名の方が来場されました。以下講演順にご紹介します。

開催にあたって一趣旨説明

永広昌之（東北大学総合学術博物館）

最近の研究で、ウタツギョリュウが生きた時代（前期三疊紀後期）の南三陸の海には、ウタツギョリュウ以外の魚竜やその他の海生脊椎動物（は虫類や硬骨魚類、軟骨魚類、両生類）がいたこと、アンモノイドやその他の頭足



1. 記念シンポジウムでは佐藤仁・南三陸町長（当時）が挨拶されました

類、腕足動物類、二枚貝類、^{のうとう}囊頭類、エビ類など多様な海生動物が魚竜とともに繁栄していたことが分かってきています。このシンポジウムは、大沢層を中心に、南三陸の三疊紀化石を研究する全国の主要な研究者が集まり、研究の現在の進行状況や今後の見通しなどを紹介する場であり、まさに新段階にある、現在進行形の研究の総まとめの発表会となります。

① 歌津館崎の魚竜化石展示とその保存活動 吉澤和子（産業技術総合研究所）

館崎の国天然記念物指定地の魚竜化石の現地展示や管の浜のクダノハマギョリュウの現地展示は、化石の産状を観察することができる先駆的な試みで



2. 記念シンポジウムの会場ようす



3. シンポジウムに登壇中の左から永広昌之、中島保寿、吉澤和子（敬称略）

した。しかし現地展示には直射日光や風雨、波浪による風化の問題がともない、実際の標本にもその影響が認められたことから、化石標本の詳細なデータを将来に残すために、観察・計測・写真撮影とともに、化石を含む露頭を3次元スキャンして、立体データを残すプロジェクトが紹介されました。この試みで復元された露頭写真は特別企画展会場でもパネル展示しました。

② 稲井層群の脊椎動物化石 中島保寿 (東京都市大学)

哺乳類・“鳥類”・は虫類・両生類・魚類などの脊椎動物は三疊紀には希少なものです。大沢層を含む稲井層群にはこれらのいくつかが含まれていて、世界的にも注目されています。とくに最近では、大沢層からいくつかの硬骨魚類が発見されています。これらには保存の良い標本もあり、他の魚類や頭足類を捕食していたのではないかと考えられるやや大型の魚類や、貝などの硬い殻をかみ砕いていたのではないと思われる化石も見つかっています。

また、南三陸ではウツギヨリユウ以外のは虫類の発見も増えてきていて、当時の南三陸の海では、さまざまな餌を食べるは虫類が共存していました。

③ 大沢層の頭足類化石 永広昌之

大沢層からは、アンモノイド以外にもオウムガイ類の直角石類、鞘形類のオーラコセラスやベレムナイト (写真5)

がこの10年の間に発見されていますが、このように頭足類のさまざまな分類群が同時に産する地層はめずらしいのです。とくにベレムナイトは世界最古のもので、中国の後期三疊紀のベレムナイトや、南三陸の初期ジュラ紀の地層からの大きなベレムナイトの産出とあわせて、ベレムナイトの発生が当時の東アジアであった可能性があります。

アンモノイドでは、大沢層での研究が近年急速に進み、大沢層産の属数は30属をこえています。ペルム紀末の大量絶滅後、それほど時間のたっていない大沢層堆積時に、アンモノイドはその多様性を回復していたことが注目されます。また、昨年から館崎の国天然記念物指定地内の崩壊地からの化石標本の“保護”プロジェクトが南三陸町と東北大学総合学術博物館によって進められていて、アンモノイドを中心とする貴重な化石標本が得られています。

④ 三疊紀の海底にくらす腕足動物 石寄美乃 (東京大学)

古生代に栄えた腕足動物はペルム紀末の大量絶滅後は大幅に減少しましたが、三疊紀の海にも暮らしていて、大量絶滅後の海洋のような貧酸素化に敏感に反応するため、生態系回復過程を理解する上で重要なグループです。大沢層からは、リングユラとブロンゾリアの2属が産出しますが(写真6)、これらは現在まであまり姿をかえない「生きた化石」です。腕足動物類は自力での移動はできないので、生息域の



5. ベレムナイト

海底面の環境を知る上で重要な生き物です。大沢層の腕足動物類は泥でできた海底に生きていたようです。なお、ブロンゾリア属は、2024年に新たに提唱された属ですが、この名前は、殻の形や模様が、とあるゲームソフトに登場する「ブロンゾー」に似ていることからつけられた属名で、遊び心が入っています。

⑤ 大沢層から産出するエビ類化石の特徴と重要性 加藤久佳 (千葉県立中央博物館)

大沢層から産するエビ化石は、館崎北方の露頭からこれまで40個体ほどが採集されていて研究中ですが、グリフェア類に属する新属・新種であろうと考えられています。わが国からのエ



4. 同じく左から鹿納晴尚、加藤久佳、石寄美乃 (敬称略)



6. 腕足動物類 (ブロンゾリア)

ビ類（十脚類）化石は、これまで山口県の後期三畳紀のものが最古の記録でしたが、大沢層からの産出はこの記録を書きかえるもので、東アジア地域でも最古の記録です。グリフェア類は中生代を通して繁栄しましたが、三畳紀や古生代のエビ類化石はごく少数の標本しか知られていないことが多く、大沢層からの多数の標本は、グリフェア類の研究の新たな進展をもたらすことが期待されます。

⑥大沢層産囊頭類群集と形態的特徴 鹿納晴尚(東北大学総合学術博物館)

囊頭類はわが国では大沢層以外からは知られていないめずらしい化石で、エビやカニなどを含む甲殻類の仲間です。オルドビス紀から白亜紀までの海洋に生息しましたが、全生存期間をつうじて40属程度しか知られておらず、大沢層という一つの層から6属もの産出があるのは世界的にもまれな例です。大沢層からは2015年のわが国からの初報告以来多数の標本が採集されています。これまで少なくとも6属7種が知られていて、その中には多くの新属や新種が含まれます。歌津館崎の天然記念物指定地内でおこなっている崩落岩塊中の化石資料保護活動で見つかった囊頭類は、甲皮の表面が滑らかな個体が多数を占めます。館崎北方の露頭の化石群集とは異なるので、囊頭類は大沢層の中でも種構成が変わってきたことが分かってきました。歌津や本吉以外の地域の大沢層からも産出

するという報告が近年ありますが、この10年間に、とくに前期三畳紀の囊頭類の研究報告が世界的にも飛躍的に増えました。大沢層の囊頭類研究はその牽引力にもなっています。

2. 化石鑑定会の開催

さて、南三陸町からは1881年のナウマンによる皿貝からのモノテス化石の発見以来、多種多様な化石が知られています。もしかしたら個人が採集して未報告のまま所蔵されている化石が町内にあるかもしれません。この鑑定会は、これらの「埋もれた」化石を持ち寄ってもらい、学術的な意義をもたせようと企画しました。会場では「スレート割体験」（総合学術博物館）、「調べものコーナー」（町教委）、「砂金採り体験」（日本遺産「みちのくGOLD浪漫」推進協議会）、「化石産地案内」および「ウツツギョリュウ木製パズル」（Hooks）なども実施しました。町外の方も含めて計72名が来場されました。

化石鑑定会に持ち寄られた化石は、南三陸町産の三畳紀・ジュラ紀アンモノイドや二枚貝、近隣市町産の古生代腕足動物類、ウミユリ、コケムシ、その他の化石類で、数十年前に採集されたものの、そのままになっていた標本もありました。福井県立恐竜博物館の化石採集会で見つけた化石や外国産の化石なども持ち込まれました。三畳紀アンモノイド、ジュラ紀アンモノイドに

は、展示標本としたいようなものもありました。一方、保存状態が良くなく、詳細な分類名をつけるのが困難な標本も多数ありましたが、ようやく何の化石かが分かり、満足した方が多かったようでした。また、外国産の魚類標本をお持ちになり、町に寄贈された方もおられました。

「スレート割体験」では、南三陸町入谷産スレート原石を使用して厚さ数mmの薄いスレート板を作製する体験をしていただきました。南三陸地域には雄勝地域・登米地域を中心に、多数のスレート鉱山がありました。スレートは、おもに泥岩が強い圧力を受けて、薄くはがれやすい性質をもつようになったものです。屋根用スレート、壁材、床材などに利用され、明治以降の西洋建築の移入にともない、東京駅（赤レンガ）の屋根など、日本でも多数の建築物に用いられてきました。入谷にもかつて10か所ほどのスレート鉱山があり、現在でもその跡がいくつか残っています。小型のナタのような道具を原石にあてて、金属棒で軽くたたくと、きれいに薄く割れることに参加者は驚かれていました。

スレート原石の採取や用具の借用については入谷の阿部忠義さんにお世話になりました。



7. 化石鑑定会のようす。手前のエリアでスレート割体験



8. 鑑定会に持ち込まれた立派な魚類化石はブラジル産と判明

3. 南三陸町歌津総合支所化石展示室のリニューアル

特別企画展が終了し、当館貸し出しの展示ケース等を撤収した後、およそ1か月半かけて化石展示室のリニューアルをおこないました（写真9）。壁際に展示ケースを並べ、中央に広いス

ペースを作り、そこに天然記念物指定されたウツギヨリュウ化石の標本を置きました。壁際のケースには地質時代・地層・分類群ごとに南三陸町所蔵の化石資料を中心にまとめ、一部は企画展で製作した解説パネルを配置して新しい常設展示を作りました。特別展示では出展できなかった世界各地の魚竜

化石のレプリカのほか、入谷の郷土文化保存伝習館に収蔵されていた化石資料も展示しました。

従来の常設展示より標本も格段に増加しましたので、ぜひご来室ください。
（文＝永広昌之・根本 潤・鹿納晴尚
／写真＝根本 潤）



9. リニューアルした 南三陸町歌津総合支所 化石展示室

みちのく博物楽団によるワークショップ「地層ジオラマづくり」を実施しました

こんにちは、みちのく博物楽団です。2025 年は、ウツギヨリュウ化石が国の天然記念物に指定されてから 50 周年の節目の年でした。私たちはこの機会に、南三陸地域の地層をモチーフにした「地層ジオラマづくり」のワークショップを企画して（写真1）、特別展会期中の7月21日（月・祝）に南三陸町総合体育館で開催された「第16回南三陸子ども自然史ワークショップ2025」に参加しました。

ワークショップでは、透明なカップに砂と粘土を交互に入れながら、南三陸にみられる三疊紀に堆積した平磯層・大沢層・風越層・伊里前層の順に、小さな地層をつくっていきました（写真2）。参加者の皆さんが砂や粘土を詰めていく作業を楽しみながら自分だけの小さなジオラマを作っていく姿がとても印象的でした。実際に手を動かすことを通して、南三陸の地層について自然

と興味を広げていただけたように感じます。

南三陸では、大沢層から産出したウツギヨリュウがよく知られていますが、ほかにも平磯層からはマストドンサウルス、伊里前層からはクダノハマギヨリュウが見つかっています。ウツギヨリュウが世界最古のギヨリュウ化石であることは有名ですが、じつはマストドンサウルスについても日本最古の両生類化石と言われています。このように多様な化石が産出することは、南三陸地域が歩んできた時間の長さ、そして豊かさを感じ取ることができます。

今回のジオラマづくりを通して、南三陸にはこんなにも多彩な化石の世界が広がっていること、そしてその奥深さや希少性を、参加者の皆さんに少しでも感じていただけていたら嬉しく思います。

（文／写真＝羽井佐千歳）



1. ワークショップ「地層ジオラマづくり」の会場の様子



2. 透明なカップに、南三陸の地層に見立てた砂と粘土を重ねていきます

2025 年度東北大学総合知デジタルアーカイブ特別展 「災害を伝える」を開催しました

ToUDA とは

東北大学総合知デジタルアーカイブ (Tohoku University Digital Archives / 略称 ToUDA) は、本学が所蔵する学術・文化資源を統合的に公開し「総合知」の形成と発展への寄与とともに社会での幅広い利活用を目指すもので、昨年度から一般向け公開を開始しました。総合学術博物館が所属する学術資源研究公開センターは、附属図書館とともに、この事業を推進しています。本事業へのご理解を深めていただく目的で特別展を開催し、関連する資料を紹介しています。

災害を伝える4つのコーナー

今年度の特別展は総合学術博物館が企画の中心となり、「災害を伝える」というテーマで、分野横断的な展示をおこないました。

自然は時として激しい姿を見せ、人間社会に多大な影響を与えます。このような過去の災害についての理解を進めることは今後の防災を考える上で、きわめて重要です。過去の災害を伝える資料は多岐に渡ります。災害の研究では、これらの資料から得られる知見を総合した、分野横断的な研究が重要となります。

ToUDA は、横断的に検索する機能を備え、異なる資料群から関連する資料を検索することが可能で、分野横断的な研究の基盤となるものです。東北大学には災害を伝える多彩な資料が収蔵・保管されていることを知っていたくことにもつながると考えます。

このような趣旨から、今回の展示では地学資料・考古資料・文献史料・絵図・絵葉書など、さまざまな資料を紹介することとしました。そのため、資料の種類ごとではなく、災害の種類により〔地震・津波〕〔噴火〕〔大雨・洪水〕〔雷〕の4つのコーナーを設定し、それぞれに関連する多彩な資料29点を展示しました。

関連講演

特別展の開催に合わせて、12月6日(土)には、文科系総合講義棟204講義室を会場に講演会を開催しました。災害科学国際研究所の文系と理系の研究者に、つぎの演題で、それぞれの立場からお話いただきました。

- ・蝦名裕一准教授「史料から読み解く災害」
- ・菅原大助准教授「大地から読み解く災害」

なお、特別展の会期中には307人の方々にご来場いただきました。



ToUDA 特別展「災害を伝える」ポスター

開催要項

2025 年度東北大学総合知デジタルアーカイブ特別展「災害を伝える」
会場：附属図書館本館多目的室
会期：2025 年 11 月 17 日(月)～12 月 14 日(日)

主催：東北大学総合知デジタルアーカイブ運営委員会／学術資源研究公開センター／附属図書館

共催：東北大学災害科学国際研究所／文学研究科／統合日本学センター

(文＝藤澤 敦／写真＝小川知幸)



特別展会場のようなす



浅間山噴火繪圖〔噴火〕



関連講演会場のようなす



地層剥ぎ取り標本〔地震・津波〕



洪水で埋没した弥生土器〔大雨・洪水〕



講演司会の藤澤 (左) と菅原准教授

東北大学総合学術博物館を離れるにあたって



東北大学総合学術
博物館技術職員

鹿納 晴尚

(かのうはるまさ)
PROFILE
1972年生まれ
専門：古生物学

2008年4月以来、18年という長い間お世話になってきた東北大学総合学術博物館を、2026年3月末をもって退職し、4月から福井県立大学恐竜学部に准教授として着任することになりました。

2007年3月に本学理学研究科で「赤道太平洋におけるアプチアン期—アルビアン期の放散虫の群集変遷と生産量：古環境変動との関係」により学位を取得し、その後地学研究科の研究生として在籍していた頃、当時総合学術博物館准教授であった佐々木理先生にお声掛けいただき、2008年度より技術補佐員として勤務することになりました。

総合学術博物館ではCTをもちいた標本の三次元化や計測にかかわる研究の補助を担当することになり、CTにかんする知識や撮影のノウハウの習得に加え、プログラミングの勉強など、現在につながる多くの経験をさせていただきました。

総合学術博物館に、微化石用の高精細CTと、大型標本の計測にも対応できるCTの2台が導入されたのは2011年11月のことです。2011年といえば、東日本大震災の年でした。地震発生当時、わたしは佐々木先生の研究室で、先生や業者の方とCTについての打ち合わせをしていました。顕微鏡を押しえながら机の下に潜り込み、揺れが収まるのを待ったあの時間は、生きた心地がしなかったのを今でもよく憶えています。

地震から少し状況が見え、落ち着き

を取り戻した2011年3月末頃より、佐々木先生と名誉教授の永広昌之先生を中心に、各地の被災博物館レスキューに向けた情報収集を開始しました。4月4日に南三陸町の魚竜館にレスキューに向かったのが、現地での活動のはじまりでした。そして宮城県沿岸の被災地を周りながら、復旧・復興とともに被災のようすを伝える風景が急速にうしなわれていくことを実感するようになりました。

2011年9月から開催された震災展示(Omnividents No. 40, pp. 5-6)のパネル作成において、3Dレーザースキャナによる被災地データをご覧になった西弘嗣教授が、この技術で震災の記録を残し、伝えていくことを提案され、その担当を佐々木先生とわたしが務めることになりました。その後、わたしが主担当となり、宮城・岩手・福島の各県にのこる70か所ほどの震災遺構を、レーザースキャナ、MMS、ドローンなどさまざまな技術をもちいて三次元で記録しました。アウトプットについても、MR、VR、CGなどを活用し、コンテンツとして利活用できるよう試行錯誤を重ねました。

博物館は圧倒的に人手不足のため、CTや震災遺構の3D計測に加えて、その他のデジタル系業務や企画展示の補助など、じつにさまざまな業務を担当することになりました。その合間を縫って、3D計測技術をもちいた研究にも幅広く協力してきました。

2015年4月に、柳田俊雄先生の後任として藤澤敦先生が着任されてからは、考古学分野にかかわる仕事も数多く経験する機会に恵まれました。東北や九州の古墳や横穴墓の3D計測、さらには重要文化財をCTで計測する機会もあり、考古学ファンからすれば全くもって羨ましいかぎりの経験をさせていただいたと思います。

こうした慌ただしい日々のなかで、はじめて自分で企画した企画展が、2019年10月から宮城県庁18階の県政広

報室で開催した「西澤潤一と東北大学」展でした。以前から密かにあこがれていた西澤先生の展示を自分が手がけることに正直おこがましさも感じましたが、大学博物館として西澤先生のご業績を取り上げることは、今後の博物館のあり方を考えるうえでも必要だと考えました。先生の著書や対談集など、関係する書籍を手に入れられるだけ手に入れ、論文も読めるだけ読み、西澤先生が生まれる前から亡くなるまでの東北大学とのかかわりを徹底的に調べ上げました。

企画展の内容は、あまり整理されていたとは言い切れず、充分ではなかったかもしれませんが、先生の業績を広く知っていただく展示にはできたのではないかと考えています。『河北新報』の読者投稿欄に、展示への反響が掲載されたことも印象深く記憶しています。

震災を契機として、学生主体の団体「みちのく博物楽団」が立ち上がりました。ワークショップの内容について学生たちに教えることもありましたが、それ以上に学ばせてもらうことも多く、他館とのコラボレーションも含めて、とても貴重な経験になりました。気がつけば団員(?)の一人になっていたようで、最も長く所属するメンバーになっていますが、今後はなかなかお手伝いできなくなりそうなのが心残りです。

また、震災を境に被災地の方々とのつながりができました。とくに南三陸町、浪江町、双葉町、そして富岡町では、化石調査、震災遺構、文化財などの3D計測をつうじて、さまざまな方々とお話しする機会を得ました。CTだけではつながらなかったご縁です。やり残したこともたくさんありますが、恐竜学部に移ってからも、微力ながら機を見てお手伝いできればと思います。長い間本当にお世話になりました。

東北大学総合学術博物館 Information



新刊紹介 高嶋礼詩 ほか 編『恐竜の時代—中生代—』 共立出版

当館館長の高嶋礼詩と、安藤寿男編『恐竜の時代—中生代—』（共立出版）が「シリーズ地球生命史（全6巻）」の第2弾として2025年8月に出版されました。本書はたんに各古生物を紹介したのではなく、国内第一線の地質学・古生物専門家による詳しい解説や、わかりやすいカラー図版が特徴で、中生代の時代区分、地殻変動、気候変動、生物相など、最新の研究成果をもとに総合的に解説しています。また、最終章では日本の中生代の地層についても総括しており、日本の中

生代の地層の成り立ちについても知ることができます。

中生代は恐竜や魚竜など爬虫類が地球を支配した時代である一方、地球史上最大規模の温暖化が起こったことでも知られています。本書は中生代の地球温暖化がどのようにして起こり、当時の生態系にどう影響をおよぼしたのかを詳しく解説しており、将来の地球温暖化で何が起こるかを知るヒントとなるでしょう。

ISBN：9784320046931、A5・484頁、6,600円（本体6,000円＋税10%）



高嶋礼詩・安藤寿男編『恐竜の時代—中生代—』
共立出版、2025年8月

理学部自然史標本館

●ご利用案内

総合学術博物館の常設展示は理学部自然史標本館にて行っています。下記は理学部自然史標本館のご利用案内です。

●入館料

大人150円/小・中学生80円
（団体は大人120円、小・中学生60円）
幼児・乳児は無料、団体は20名以上です。

●開館時間

午前10時から午後4時まで

●休館日

毎週月曜日*1、
お盆時期の数日*2、年末年始*2、
電気設備の点検日（例年8月最終日曜日）*2

*1 月曜日が祝日の場合は開館、祝日明けの日が休館となります。

*2 日にちが確定次第ホームページにてお知らせします。



総合学術博物館の ホームページもご覧ください



東北大学総合学術博物館のホームページ
<https://www.museum.tohoku.ac.jp/>

東北大学 総合学術博物館 THE TOHOKU UNIVERSITY MUSEUM

〒980-8578
宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-3
tel/fax. 022-795-6767
©The Tohoku University Museum

Omnividents

【オムニヴィデンス】

Omnividentsはラテン語で、英語のall-seeingに相当し、「普く万物を観察する、見通す」の意味をもっています。



●交通手段

■仙台市地下鉄

仙台市地下鉄東西線「青葉山駅」で下車（仙台駅より乗車時間9分）。「青葉山駅」北1出口より徒歩3分。

■仙台市観光シティーバス「るーぶる仙台」

JR仙台駅西口バスプールより乗車。「理学部自然史標本館前」で下車。所要約30分。

■自家用車

東北自動車道仙台宮城インターチェンジより仙台市街方面へ向かい、青葉山トンネルを仙台城方面に出て、右折2回、大橋経由。駐車場あり。